わたしと図書館　本が教えてくれたもの

経済学部国際経済学科１年生　山内佑夏

わたしはもともと本が好きだ。いつの頃からかはわからないが、記憶にある限り、ほとんど本を手放したことがない。

わたしが本を読んでいる一番古い記憶は、幼稚園の頃だと思う。その頃は、まだ絵本だったが本に夢中で、迎えに来てもらったことすら気づかずに本を読んでいた。初めて図書館に行ったのもほとんど同じ頃だと思う。その頃から公立図書館や小学生になってからは学校図書館をよく利用している。

最初の頃は、ただ、面白い本がないかと本棚の間を歩き回っていた。絵本、昔話、童話、神話、探偵小説。小学生の頃に気に入って、今でも読んでいる本も多い。日本の古典文学を読み始めたのもこの頃だろうか。何気なく読み始めたらとまらなくなり、借りて帰った記憶がある。最初に読んだのは確か『源氏物語』だった。最初は面白いというより小難しいと思った記憶がある。それでも読みきった理由はいまだにわからない。今でも時々読むけれど、読むたびに違った発見があるのでかなり面白い。もっとも、古典は現代語訳しか読まないけれど、読んでいてよかったのは、話の大筋がわかっていたので授業のとき、それまでより少しまともな訳になったことだろうか。

最近は、読みたい本を探すためだけではなく、情報の検索にも図書館を利用するようになって、図書館との関係は少し変わったように思う。探している資料をいかにすばやく見つけるのか。司書課程の授業を取るようになって今まではかなり苦手だった検索もだんだん速くなってきた。

わたしにとっての図書館は、夢と現実の交差するとても面白い場所だ。本を読んでいれば、現実逃避をすることだってできるし、もちろんいろいろな情報を見て、現実の怖さも知ることができる。医療の水準、諸外国との関係、水産資源の問題や、科学の発達の怖さ。ある本を読んでいて、あまりに怖くなってやめたこともある。今まで何気なくやっていたことの怖さを教えてくれたのも図書館だった。使用量を守れば何ということもない薬品が、使用量を間違えると体に影響を与えてしまう怖さ。過剰投与が耐性菌や耐性のある昆虫を生みさらに強い薬品を作り、使わないといけなくなってしまう怖さ。使用量は守ろうと思ったことが何回もある。

図書館に行けば、いろいろなことが調べられるし、知ることで、もっと知りたいと思う。将来に、何がしたいのか、どうしたいのか、図書館を活用するのもいい方法だし、私自身、そういう使い方をすることも多い。図書館は、単一の使い方をするものではなく、最低限のルールは守らなくてはいけないが、いろいろな使い方があると思う。自分自身にあった使い方さえ見つかれば、図書館は今までよりも楽しい場所になるのではないかとも思う。

何を読むか、どんな本を読むかというのはその人の勝手だし、他人の言いなりになるものでもないと思っている。とはいえ、きっかけがないのは読みにくいので、かなり独断と偏見で読みやすいと思った本をあげておくので、よければ参考にしてもらいたいと思う。

・ライトノベル

彩雲国物語（角川ビーンズ文庫）

雪野紗衣・作

アニメ化されたのでご存知の方もいるかもしれませんが、中華風ファンタジー。近頃、40代の方にも人気があるとのこと。

・時代小説

居眠り磐音江戸双紙（双葉文庫）

佐伯泰英・作

NHKの木曜時代劇で映像化されました。主人公とまわりの個性的な人が印象的です。

・鎌倉河岸捕物控（角川ハルキ文庫）

佐伯泰英・作

江戸の町人たちの生活が垣間見られるような作品です。

・ファンタジー

ヒストリアン

エリザベス・コストヴァ・作

失踪した父親を探して一人の少女が手がかりを頼りにヨーロッパを旅します。

機会があればぜひ読んでみてください。